

天野博人さんを偲ぶ

去る8月29日、私ども「沼津芹沢光治良文学愛好会」（以下「沼津芹沢愛好会」。）の顧問をしてくださった天野博人さんが亡くなりました。

天野さんは、昭和15年6月16日、山形県山形市生まれ。教職だった父君の転勤で大阪などに住んだあと沼津に移り、静岡県立沼津東高等学校から山梨大学に進まりました。社会に出ると、南米・ブラジルなど各地で鉱業土木や船艇関連の新事業に、もちまへの全力発揮の精神でとり組まれ、多くの人に愛されてきました。会社生活を終え沼津に戻ってからは、たくさんのゴルフ仲間をつくり、また花の育苗や造園を楽しむいっぽう、郷土史関係の研究書や史料に関心をもち、芹沢光治良の作品を愛読しておられました。

天野さんの母方の祖父は、前田千寸（ゆきちか）です。『人間の運命』に「前川先生」として登場し、当時中学生の主人公「森次郎」の生きかたに大きな影響を与えます。じっさい前田千寸は、約四十年にわたり沼津中学校（現・県立沼津東高等学校）で美術、国語の教鞭をとり、「芹沢光治良、井上靖、大岡博など多くの子弟がその人柄に魅かれた」（『沼津東高八十年史』）といひます。天野さんも、作家として名を成した芹沢や井上が祖父を訪ねて来たとき、ちよくせつ言葉を交わしたことを覚えていると語ってくれました。

天野さんの魅力のひとつは、すぐれた「芹沢文学の批評家」だったということです。天野さんは、光治良作品の隠れた魅力をひき出し、読書仲間の眼の前にひろげて見せてくれました。古いギリシャ語“クリティーク”は、批評対象の「悪いものを取り去りつつそのあとに残る価値あるものを見出すことを最終課題とする」ことを意味していて、日本語の「批判・批評(=criticism)」よりはるかに肯定的な意味をもつ語だと聞いたことがあります。天野さんは、芹沢作品を“クリティーク”の眼で読んでおられたのだと思います。

「沼津芹沢愛好会」の定例会では、天野さんは「傾聴する心」で仲間との対話（dialogue）を楽しんでおられました。

昨年、「沼津芹沢愛好会」は、沼津市内の高校生たちと「光治良作品をめぐる対話会」を主催し、天野さんも参加しました。ある高校生が、光治良作品のなかに魅力的な表現をみつけて気づいたことを説明してくれました。天野さんは、達磨大師のような体躯のすべてを耳にして、発言者を見つめて、大きく頷いておられました。発言した高校生は、対話会の素晴らしさを経験できた、と感想を寄せてくれました。70年以上の歳を隔てた参加者同士が“言葉を交わす（dialogue）”

すばらしい対話でした。

天野さんは「先頭にたって行動する」人でした。「沼津芹沢愛好会」は昨年、芹沢作品を次世代に伝える新しいプログラムを企画しました。沼津市芹沢光治良記念館への来館者を増やすことを目標に、施設周囲の環境整備、記念館を会場にした展示会や会員以外にも参加してもらい“公開定例会”を具体的に計画しました。天野さんは、記念館周囲の花壇づくりを約1年かけて準備し、花苗づくり、土の入れ替え、整地などをコツコツと進めました。春には間質性肺疾患が進んだので酸素ボンベを背負って、未明からひとりで作業をされていました。その努力に、沼津市100周年の「花いっぱいコンクール」で奨励賞が授与されました。リーダーシップとはこういうことを指すのだと、感銘を受けたものです。

そして、亡くなる2日前まで、張りのある声で、私どもに助言を下さいました。

酒を楽しむ天野さんも魅力的でした。膳の向付に旬の菜浸しと白身魚の刺身を置いて、好みの新潟のひじり（清酒の異称）の温（ぬる）めを、おもむろに口に含んで満足そうにしておられました。微笑ましい達磨さんを思わせるような所作でした。

天野さんの明朗で悠揚なお人柄にふれた「沼津芹沢愛好会」の仲間は、有難く楽しい時を過ごすことができました。

本当に有難うございました。

沼津芹沢光治良文学愛好会 不破久温